知べし、尤大入大繁昌にて、諸の芝居を撒潰せしよし、同書に見へたり、放屁論云、上略加樣の曲庇を放ことを聞ず、又仕掛ならんとの疑ひ、尤に似たれども、竹田の舞台に事かはり、四方四面のやりはなし、玄かも不埒の取しまり、何に仕掛の有とも見えず、數万の人の目にさらし、仕掛の見えぬ程なれば、譬仕掛ありとても、眞に放と同前なり、衆人眞に放といはゞ、其糟をくらひ、其泥を濁らして放と思て見がよし、扨つく〳〵と按ずれば、斯世智辛き世中に、人の錢をせしめんと、千變万化に思案して、新しき事を工とも、十が十、餅の形、昨日新しきも今日は古く、固古きは猶古し、此放屁男ばかりは、咄には有といへども、眼前見ことは、我日本神武天皇元年より、此年安永三年に至つて、二千四百三十六年の星霜を經といへども、舊記に見へず、言傳にもなし、我日本のみならず、唐土、朝鮮をはじめ、天竺、阿蘭陀、諸の國々にも有まじ、於戲思ひ付たり、能放たり云々、

〔書言字考節用集五肢體〕屙（トウタリ）兩股之間　會陰同

〔倭訓栞前編二〕ありのとわたり　蟻の門渡の義、とわたる舟などいふに同じ、其往來道あるを以ていへり、山家集に、

篠深み切みづぐきを朝立てなびきわづらふ蟻のとわたり、前陰と肛門との間を會陰とす、是をも俗に名を同うす、其一道のすぢあるをもてなり、

〔塵塚物語五〕赤松律師兵書之事

一手の中と、ありのとわたりとかゆくなりたれば、大事ありと知べし、但し右の手の中かゆくば吉也、

〔經穴纂要五〕周身名位骨

纂金鑑曰、横骨下、兩股之前、相合共結之凹也、前後兩陰之間、名二下極穴一、又屏翳穴、會陰穴、卽男女陰氣之所也、人鏡經曰、纂內深處爲二下極穴一、

〔倭名類聚抄三埜垂〕陰　釋名云、今案、玉埜玉門等之通稱也、蔭也、言其所二在蔭翳一也、

蟻門渡

陰